写楽殺

今江祥智

写楽殺人

作者　今江祥智（いまえ・よしとも）　NDC 913　A 5 変型 20 cm 314P

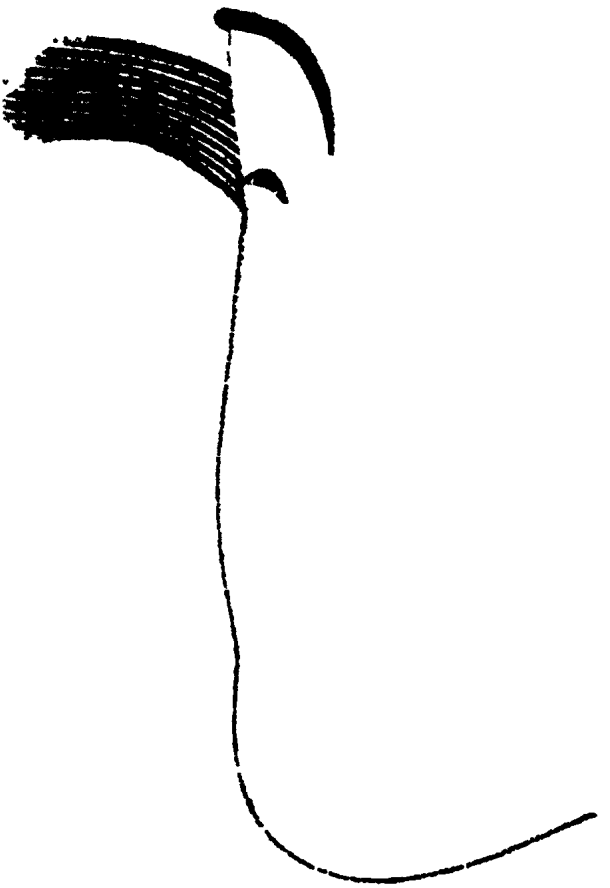
意匠　杉浦範茂（すぎうら・はんも）　1982年初版　8393—31524—8924

写楽暗殺　1982年3月第2刷発行©

制作 小宮山量平　発行 山村光司　発行所　株式会社　理論社

住所　東京都新宿区若松町104番地　電話 03 (203) 5791　振替東京 9-95736

写楽暗殺＝もくじ



第一章‖モンキー・マジック‖7
第二章‖イエスタデイ‖18
第三章‖カモンナ・マイ・ハウス‖30
第四章‖イミテーション・ゴールド‖42
第五章‖マイ・フェア・レディ‖53
第六章‖トゥ・ヤング‖63
第七章‖ムーン・リバー‖74
第八章‖オンリー・ユー‖85
第九章‖ストレンジャー‖96
第十章‖マイ・ウエイ‖107
第十一章‖メランコリー‖118
第十二章‖フェーム‖129
第十三章‖ゴッドファーザー‖140
第十四章‖クール‖151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十五章＝セ・シ・ボン＝162
第十六章＝ライト・アズ・ア・フェザー＝174
第十七章＝スーパー・スター＝185
第十八章＝サイド・バイ・サイド＝196
第十九章＝ムーンライト・セレナーデ＝208
第二十章＝サンライズ・サンセット（上）＝219
第二十一章＝サンライズ・サンセット（下）＝230
第二十二章＝イッツ・ア・ビューティフル・デイ＝241
第二十三章＝ノー・グッバイズ＝252
第二十四章＝シャンハイ・バンスキング＝263
第二十五章＝サンデイ・ブラデイ・サンデイ（上）＝275
第二十六章＝サンデイ・ブラデイ・サンデイ（下）＝286
第二十七章＝レフト・アローン＝299
あとがき＝311

画＝東洲斎写楽
彫匠＝杉浦範茂

写楽暗殺

第一章
モンキー・マジック

一

生まれてこのかた、夕子は、猿のことなど気にしたことがなかった。それが、この二日間で、猿のことが気にかかって仕方なくなってしまった。むりもない。

二日の間に、これまで見たこともないおかしな猿と顔つきあわせ、もう一つ、靫猿（うつぼざる）というかわいいのとであってしまったからなのだ。

まず、夕子をそのおかしな猿とひきあわせてくれたのは、岐阜の前田の叔父さんだった。前田の叔父さんは、岐阜の大学で先生をしていて、女子学生に〈動物行動学〉とかいう学問を教えているということだ。そのせいか、近くの犬山にある日本モンキー・センターには、ちょくちょくでかけていて、そのことをとても気にいっているらしかった。叔父さんが夕子にくれる年賀

状やバースデイ・カードのすみっこには、きまって「いちどモンキー・センターをあんないさせて下さい。ご先祖さまにあわせます……」と、書きそえてあった。

その犬山行きが、この土曜日にやっと実現したのだ。三日続きの連休だった。ちょうど名古屋に用があるというとうさんにくっついて、夕子は前田の叔父さんのところへつれていってもらった。

叔父さんは夕子がつくのを待ちかねるように、すぐに犬山へ案内してくれた。みちみち叔父さんは、そこには八十種類あまりもの猿が飼われていて、大はマウンテン・ゴリラの生きたのから、小は小鳥くらいの猿まで見ることができる……と話してくれた。

（小鳥くらいの猿なんか、いてるはずがないのに……）

と、夕子は思ったが、叔父さんの真剣な表情を見ると、口にはできなかった。そのかわり、思いうかべられるかぎりの猿の種類を復習してみることにした。

（ゴリラ。チンパンジー。オランウータン。テナガ猿。オナガ猿。メガネ猿。キツネ猿。それにもちろん、日本猿……）

それでおしまいだったが、小学校の五年生というとしにしては、それでもけっこう知っているというべきだった。

（そやけど、猿が八十種類もほんまにいてるやろか。チョウチョならべつやけど……）

しかし、いざモンキー・センターについて、広びろとした坂道とモンキー・アパートの案内図を見ると、もしかしたらやっぱり叔父さんの言う数だけいろいろな猿がいるような気もちになった。

坂道をのぼり、ビジター・センターに入り、叔父さんのかんたんな説明をきいた。鼻をきかせるかわりに、目をきかせるようになったのが、そもそも、他のけものたちと猿——人間との別れ道だというこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とが分った。つきでた鼻がひっこみ、低くなり、かわりに目がならぶようになると、なるほど、キツネや犬とちがって、人の顔に近づくわけだ。

マウンテン・ゴリラの剝製の前のケースに小さな猿の剝製もならべてあった。その小ささに、夕子はたしかにおどろいた。けれど、それは剝製だからちぢんだのではないか、とまだ思っていた。

それからモンキー・アパートの見物が始まった。次から次と、いることいること。どれもこれも顔かたち、毛いろ、動きまわるようす、鳴き声、こちらを見る表情、しぐさ……なんかが、いちいちちがっていた。そして、よく見ると、どの猿も、たしかにだれかに似て見えてくるのだった。

オランウータンは、一年生のとき夕子をいじめた広岡さんに似ていた。小枝をにぎりしめてこちらをにらんでおどすところまでそっくりだった。どこか仙人じみた顔つきのブラザモンキーは、横町の薬屋のおじいさんにそっくりだし、ものおもいにふける哲学者といったところがあるテング猿は、担任の石塚先生に似ていた。こうして次々に見ていけば、いずれうちのおじいちゃんそっくりの（つまり、わが家のご先祖さまにあたる）猿にであうような気になってきた……。

そこで、南米館というところへ入り、鳥のおりそっくりのおりに入れられた何十という小さな小さな猿の群れを見て、息をのんだ。いったいこれでも猿なんだろうか。どれもこれも、てのひらにのせられるほどの大きさしかなかった。とにかく小さいのである。それが、小鳥の飛びまわるように、枝を走り渡りとびまわり、小鳥のように、ちちちちち……とさえずるように鳴くのである。

しかもその小さな小さな顔は、目鼻だちなどひどく人間に似ていて、それを思いきってちぢめたようなあんばいなのだ。そいつが、シャツのボタンくらいの目で夕子をじっと見つめ、小首をかしげて鳴くのである。夕子はそんな猿をてのひらにのせてみたくなった。文鳥みたいに飼いたくなった。なかには

クロクビタマリンのように、犬の顔そっくりなのが小鳥の体についたようなのもいて、それだと、犬と小鳥をいっしょに飼っている気になるだろうな……と思ってしまった。するとまた、そんな夕子の気もちが分ったかのように、ちっぽけなマーモセットがいくつもいくつも、夕子の顔の前に集まってきてくれるのだった。夕子はその館の小猿の群れのことを、すっかり気にいってしまって、長いこと、そこにいた。叔父さんは夕子が気のすむまで見るあいだ、のんびり待っていてくれた。

そのあと、夜行性のスロー・ロリス（特大のトンホめがねをかけたみたい）や、テナガ猿の森もおもしろかったが、夕子には、なんといっても南米館の小猿の群れが心にのこった。

その夜、叔父さんちに帰り、お風呂もゆっくり使わせてもらい、（一日動きまわったので充分疲れていたから）すぐにでも眠れるはずなのに、夕子はなかなか寝つかれなかった。

目をとじると、昼間見た猿たちが、次々に目の奥の暗闇にあらわれては消えるのだった。なかには、昼間やったように、いきなり夕子の目の前に手をつきだしてきたりするのがいると、おどろいて目をあけてしまうからだった。

家でなら、起きていって、かあさんの横に床をとり、そこで眠らせてもらえるのだが、叔父さんちでは、そうはいかなかった。眠れないときよくやるように、夕子は羊の数を数えることにした。

（羊がひとつ、ふたぁつ、みっつ、よっつ、いつつ……）

夕子の頭の中に、まっ白な綿菓子みたいな羊がならび始める。綿菓子がふくらみふくれあがって白い雲になり、夕子をそっと包み始める。雲の中で夕子は目をつむり、ふんわりしたいい気もちになる。これでやっと眠れそう……と思ったとたん、何十ぴきもの日本猿の群れが、いきなり羊の白い雲のなかへなだれこんできた。夕子はびっくりし、同時にモンキー・センターの入口で見かけた注意書を思いおこ

していた。

「ご注意

酒気をおびた人、または、犬その他の動物をつれた人の入園はお断りします。」

しまったと思ったが、もう手おくれだった。羊はあっというまに追い散らされ消されてしまい——夕子の頭の中はまた、かけまわりとびまわる日本猿の群れでいっぱいになり——、目はしーんとさえかえってしまった。

こうなると、なんだか自分まで猿になってしまったみたいで、夕子は思いきって起きあがり、寝床の上に坐り直した。猿島の猿がよくするように、肩をまるめ首をちぢめ、きょとんとした目で、ゆっくりあたりを見まわすのである。——部屋の中はまっ暗で、ほとんど何も見えず、そのままじっとしていると、ちょうど、夜の森のどこかにうづくまる猿、といった気もちになった。家の中は寝しずまっていて——森全体がしずまりかえっていて、夕子はひとりぼっちの離れ猿といったところで、なんだか、しょんぼりした気もちになってくる。体が小さくちぢまってくるようだ。小さく小さく、……。犬よりも小さく、猫よりも小さく、そう、ちょうど小鳥くらいの大きさになってしまった——と思ったとき、夕子は耳許であの、

—ちちち、ちちちち……。

という、なつかしい鳴き声を聞いた。夕子も同じ声で返事してから、ああわたし、ワタボウシ・タマリンになったンやわ……と思った。体が軽くなり、床からとびあがってみた。木の上に集まっていた仲間が受けとめてくれ、いっしょにかけだした。心が軽くなり、闇がこわくなくなった。夕子の体は小鳥

みたいに宙にういて――とてもおだやかな気もちだった。そしていつのまにか夕子はやすらかな寝息をたてて、ことりと深い眠りの中におちこんでいった……。

二

あくる日の夕方、こんどは叔父さんが京都にきていた。夕子のとうさんの招待で、いっしょに狂言見物というわけだった。狂言も、あのおかしな猿同様、夕子にとって初めて見るものだった。

そんな昔のお芝居、わたしにも分る？

夕子はとうさんにねんを押してきいてみた。わかるわかる。日本のもんやないか。お前も日本の女の子やないか。とうさんは面白そうに言うだけで、てんでとりあってくれなかった。そやかていつかテレビでちょっと見た歌舞伎も、お正月に見たお能の舞台もことばも、さっぱり分らへンかったもン……。

夕子はすねたように言いつのったが、やはり相手にしてもらえなかった。百聞ハ一見ニシカズ……と何やら難しいことを言われただけだ。

会場のどこにも、夕子くらいのとしの女の子なんて坐っていなかった。若い人は思った以上にいたが、だいたいが、おっかなそうな顔つきの大人であり、おとしよりだった。見まわしたり見つめたりすると、注意されたり、叱られそうで、夕子は座席にかたくなって腰をおろし、そっとあたりをうかがいながら、

（あ、あのおじさんは、パタス・モンキーみたい。あ、あちらはマントヒヒそっくり……）

と、くらべてやることにした。それだと少しは気が楽になってくると思ったからだ。さいわい手提げには、犬山でもらったモンキー・センターの案内パンフが入っていて、そこには何種類もの猿がカラー写真入りで紹介されている。夕子はそいつをそっと開き、近く遠くのシートにもたれる大人たちと猿の

ひきくらべに熱中した。ほんまに、猿に似た人が多いこと……やっぱり、人間のご先祖さまだけのことはあるわ……。

ふいに、舞台から声が——歌うようないい声が流れてきて、夕子はあわててパンフレットを閉じた。

——……これは、このあたりに住いいたす者でござる。天下治まり、めでたい御代でござれば、このあいだのあなたこなたの茶の湯は、おびただしいことでござる。それにつき、それがしも、今日は山一つあなたへ、茶くらべにまいりますが、おりふし、茶のつめたものがござらぬによって、伯父御の方へ借りにつかわそうとぞんずる。まず太郎冠者を呼び出だいて、申しつきよう。ヤイヤイ太郎冠者、あるかやい……。

*

これなら分りそう……と、夕子はほっとした。舞台では、主人の前にかしこまった太郎冠者に、用がいいつけられていた。茶くらべ用のお茶の上等、でかけるとき身につける太刀ひとふり、おまけに乗っていく馬まで借りてこいというのだった。それはちとあつかましすぎるのでは——と思った太郎冠者は、一人では無理で——と抵抗する。すると主人は、では、馬の口をとる者もついでに借りればよいと、むちゃを言うのである。

太郎冠者は、ぼやきながらでかける。伯父御どのにあい。たのんでみると、気のいい伯父御どのは、茶も太刀も馬までも貸してくれるが、家の者はみないそがしくて、馬の口ひく馬丁まで貸すのはむりだから、ひいて帰るように言う。しぶしぶひいて帰ろうとする太郎冠者に伯父御どのは注意する。この馬には悪い癖がついた。横でセキをするとかけだすというのである。太郎冠者が、いま風邪気味で困りましたな、というと、

—寂蓮童子六万菩薩、静まりたまえ、止動方角、止動方角。

ととなえて、のり静めればよいと教えてくれた。

さて、太郎冠者がやっとのおもいでもどってくると、主人は待ちくたびれたようすで、おそすぎる、どこそで油を売っていたのだろうと言いつのり、礼のひとつも言わない。腹にすえかねた太郎冠者は、馬の横にいって、エヘンエヘンとせきばらいをしてやる。たちまち馬はひとはねし、主人はころげ落ちる。それを見とどけてから太郎冠者は馬にのり、例の呪文をとなえてのり静める。

やっと馬にのった主人が、こんどはまた、太郎冠者に、やれ先へいけとか、あとからついてこいとか文句ばかり言うので、も一度セキばらいで馬をはねさせる。主人はみごとに落馬。したたかに腰骨を打った主人は、もう馬にはのらぬと言う。かわりに太郎冠者にのらせ、自分は太刀や腰桶をもって歩くことになる……。

これなら、夕子にもよく分った。せりふもはっきり聞きとれるし、筋書きもよく分るし、おかしさも分る。夕子はだれよりも澄んだ笑い声をあげた。横で、とうさんも満足そうだった。止動方角というおまじないの言葉も面白くて、夕子はいつか見た『メアリー・ポピンズ』の映画にでてきた長いおまじないのことばといっしょに、これもおぼえておこうと思った。いつか友だちを煙にまいてやるために……。

「止動方角」の次に演じられたのが「靱猿」という出しものだった。猿という文字を見て、夕子は叔父さんと顔を見あわせた。ほんとの猿が出るのやろか。あんな大人に猿のまねができるもンやないもン……。夕子は、かたずをのむ思いで舞台を見ていた。

こんどの舞台も主人である大名と太郎冠者のやりとりから始まった。どうやら、弓自慢の大名が狩り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com